

小林久三火の鈴

火の鈴



昭和51年11月30日 初版発行

著 者 小林久三

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見 2-13-3 郵便番号 102
電話 (東京) (265)7111 <大代表> 振替 東京3-195208

印刷・製本 凸版印刷

©Printed in Japan

0093-872173-0946(0)

目次

火の鈴

三

火の穿あな

四一

火の壁

一四四

火の坂道

一四九

あとがき

一五〇

装
幀

辰
巳

四
郎

火の鈴

私が、その奇妙な脚本家の名前をはじめて耳にしたのは、十二年前の五月初旬のことである。

その年、太平洋映画多摩川撮影所に入社した私は、新明監督の「夏の嵐」の演出助手につくことになった。助監督としての初仕事だった。

新明好道は、当時、日本映画を代表する映像作家だった。女を描いては比類のない手腕の持主といわれ、冷雨のようにするどい映像感覚とともに、文字どおり映画界きっての巨匠として撮影所に君臨していた。

新明監督のもとではたらくことになった私は、チーフ助監督につれられて製作部二階にある監督室にいった。初対面の挨拶のためである。

監督室に足を踏み入れた私は、一瞬気おくれを感じた。一流ホテルのラウンジを連想させる落ち着いた感じの広い部屋の中央のソファに、監督は坐っていた。背後の棚には、数かずの映画祭やコンクールで獲得した黄金のトロフィーや楯がかざられている。トロフィーや楯を背にしてパイプをくゆらす小柄な監督の姿には、一種形容しがたい威圧感のようなものが漂っていた。高名な俳優や作曲家、カメラマンが彼をとり巻いて、談笑している。

私は新明好道の前に立った。

「塩月保くんです」

チーフ助監督が私を紹介した。監督はそれが特徴である巨きな目をむけ、しばらく観察するように私をみつめていたが、やがて薄い金属の細片のような唇をひらくと、

『『死者からの挨拶』を読みましたよ』

と、短くいった。男にはめずらしいメゾソプラノだった。

女性的な丁寧なしゃべり方だが、語調を硬い芯のようなものがつらぬいていて、きく者の耳に一語一語がするどく刺しこまれてくるような感じだった。

「はい」

私はからだを固くした。それだけというのがやっとなかった。巨匠という、映画界独特の事大主義的な呼称に内心反撥し、彼の作品をこっぴどくきおろしてやるつもりでいたのである。会う前に用意してきた言葉が、頭のなかから消しとんでしまっていた。このように面と対峙してみると、地方出身の私にとって、新明好道はなんともまばゆい存在に映ったのである。

談笑の聲がびたりとやんだ。周囲の好奇の目が、私にそそがれてくる。私はますます身を縮めた。監督がつづけた。

「脚本をどんどん書くことです。書くことで、うまくなるものです」

「死者からの挨拶」は、私が助監督室で発行しているシナリオ集に発表した脚本である。助監督室は入社後一か月以内に脚本を書くことが不文律になっており、苦しまぎれに書きあげた代物だった。文字どおり、処女脚本である。新明好道は、演出家としてばかりではなく、脚本家としても、映画界

屈指のひとつである。未熟な脚本を読まれたかとおもうと、恥ずかしさで頭が火照った。なにもいえないくなった。

監督はそんな私をみて、

「どこの出身？」

と、話題をかえた。

茨城県（こが）の古河です、と私は答えた。

「古河ねえ」

監督は目をほそめ、記憶をたどるような表情になったが、となりに坐った脚本家の顔をのぞきこむと、

「栗山くん（くりやま）というのは、たしか古河出身だったね」

と、きいた。前髪を額の前できれいにそろえた童顔の脚本家は、

「栗山くんですか」

と、とまどったような声を出したが、じきに、

「ああ。あの『火の鈴』を先生に送ってきたひとですね。栗山重吉（くりやまじゅうきち）といった……」

と、応じた。脚本家の目をちらっと軽侮のいろがかすめた。

脚本家として、世間に知られた男である。シナリオの実力よりも、銀座の有名画廊の女性経営者と結婚したことで知られていた。長いあいだ、新明好道の助監督をつとめ、脚本家に転向した。同性愛（ホモ・セクシ）嗜好者（ホモ・セクシ）でしられるこの監督の愛人だったという噂があった。画廊の女主人と結婚したのは、監督が助

監督のなかに新しい愛人をみつけたため、お役ごめんになったからだという噂が、所内にささやかれていた。脚本家と同期の助監督は、

「彼が新明好道に身をささげたのも、新明の庇護をうけたため、五つも年上の女と結婚したのも終身年金をもらうためさ。新明と別れる手切れ金に、一生、脚本家として面倒をみるという約束をとりつけたという話だ」

と、辛辣な言葉を口にした。

入社してまもない私は、有名な監督の背後にある奇怪な人間関係に目をみはり、現実にはそれらの男たちをまのあたりにしていることで、胸に息苦しさを覚えた。

監督は視線を私にもどすと、

「栗山くんは、とてもいい脚本を書くひとですよ。こんど原稿をもってきてあげるから、ぜひ読んでごらんさい」

それだけいい、不意に冷淡なまなざしで私を一瞥し、そのあと脚本家の手をとると愛撫するようにゆっくりながら、ふたたび取り巻き連中と声高に談笑しはじめた。

監督との初対面の挨拶は、それですんだ。

チーフ助監督と私は、監督室を出た。

鉛筆のように痩せて蒼白いチーフ助監督は、階段をおりながら、

「ま、合格だな。初対面であれだけ監督がしゃべるのは、めずらしい。きみの脚本に興味を起こしたらしいな。あのひとの脚本鑑定力は拔群だ」

と、唇を曲げ、急に声をひそめ、

「だが、どうみてもきみは愛されるタイプじゃない。童顔の美少年型しか、興味をもたんのだよ、あの監督は。夜のお伽の相手をさせられる心配はない」

そうささやくと、奇怪な鳥のような声で笑った。

私はひどく憂鬱な気分になった。新明好道の周囲に群らがる連中がকাশ出す、妙にべとつくような雰囲気、私の気分を湿らせたのだ。

けれども、新明監督の言葉がひとつだけ、妙に私の耳の底にのこった。

〈栗山重吉。「火の鈴」〉

栗山重吉という脚本家は、私の記憶になかった。すくなくとも映画の脚本は書いていない。テレビのライターかもしれないと考えた。テレビの脚本を書きながら、新明好道に映画用の脚本をもちこんだのだろうか。あるいは、脚本家志望の青年かもしれない。

私は同じ町出身の「火の鈴」の作者に、ぜひいちど会ってみたいとおもった。同郷のよしみ、といった素朴な感情が、そのときの私の胸を充たしていた。

それが、幻の作者を追って私が暗い迷路にふみこんだ第一歩だった。

2

翌日、新明好道は約束どおり、「火の鈴」の原稿をもってきてくれた。

二百字づめ原稿用紙三百枚をこす大部の脚本だった。ガラスペンかなにかで、原稿用紙のマス目のひとつひとつにきぎみこんだような硬い、几帳面な文字で書かれている。

その夜、撮影所の寮の一室で私は「火の鈴」を読んだ。最初のページをひらいて、私は興味をひかれた。

それは、つぎのような書き出しではじまっている。

シーン1、街全景

北関東の一画にひっそりと息づく街。

低い家並み。街を南北に割って走る旧日光街道。

強い北風が、往還を吹きぬけていく。

荷馬車が通る。

その車輪にタイトルがかぶる。

昭和四年冬。

古河——生糸とお茶で知られる古い城下町である。

内容は、崩壊していく旧家の歴史を背景に夫婦の愛憎を粘着力のある筆で描いた年代記ものだった。古い酒造家の跡継ぎは、妾腹しやうぶくの子で、三歳のときこの家にひきとられたという過去をもっている。

昭和十二年の冬、彼は女中を強引に犯し、自分の妻にしようとする。それは、街名物の野木のぎ明神あきみの提

灯もみ祭りの夜だった。

犯された女中は、魂をうしなつたように祭りにわく町にさまよい出る。夜空には、長竿の先端につけた提灯がいり乱れて舞い、弓張り提灯を手にした寒夜参りの男たちの腰についた鈴の音が、冴えざえと街にひびき渡る。

女中には愛した男がいた。

同じ酒造家に奉公していたその男は、そのころ郷里の東北の連隊にいる。女中は、闇夜にきらめく提灯の火を眺め、澄んだ鈴の音を耳にしながら、町の西部を流れる渡良瀬川に投身自殺をはかるが、助けられて命をとりとめる。

女中はやがて自分を犯した男の妻になる。除隊してきた恋人が、殺人を犯して服役したことで、彼女は男へのおもいを断ち切つたのだ。だが、彼女の胸には殺人を犯した男の面影が灼きついており、夫を心の底で憎みつづける。

家業の酒造りは、競争相手に蹴おとされ、しだいに没落していく。

戦後、癌を病み、死の床についた彼女は、手にしっかりと小さな鈴をにぎりしめている。鈴は、男が召集令状をうけとつた日、彼女にくれたものだった。男は、その鈴を腰につけ、毎年野木明神に寒夜参りをつづけていたのだった。

脚本は、彼女が耳の底に鳴りつづける幻の鈴の音をきき、闇に舞う無数の提灯のあかりを幻覚しながら死ぬところで終わっているが、読み終えて、私はこの作者の的確な描写力と構成力におどろいた。薄倅の女主人公を象徴する小道具の鈴のつかい方もみごとで、文字の底から鈴の音がきこえてくるよ

うな気がした。

へこれはまぎれもなく傑作だ」

と、私はおもった。映画化されている脚本の水準をはるかにこえている。

映画化されないのは、内容がいかに暗すぎるためであつたろう。だが、私は作品に漂う暗く沈鬱ちんうつな作者の心象にひかれた。フィルムにおさめられないことが、いかにも理不尽なことであるかのようにおもえてきた。

△「火の鈴」の作者は、どんな人物だろうか

さまざまな想念が湧いた。若いとはいえないだろう。三十をこしていることは確かなようである。

無名であることからみて、脚本家として恵まれた状態にあるとおもえない。脚本そのものが、不運な女主人公ヒロインと同じ運命をたどっているようにおもえ、私は頭のなかで、作者のイメージと女主人公ヒロインのそれとが二重写しになってみえてくるような気がした。

私は、新明好道にこの作者の住所を確かめた。

栗山重吉は、横須賀市の追浜おっばまに住んでいた。すでに古河をはなれているのだろう。

「夏の嵐」は克蘭クインした。完成までに三か月を要する長期撮影だった。

秋の芸術祭参加作品としてつくられたのだが、五十半ばをこえ、さかりを過ぎた新明好道の演出は、どこか鋭さに欠けていた。セットのなかでも、時折り、おもいあぐねたように頭を垂れて、監督椅子によりかかっている。チーフ助監督にうながされて、はっとしたように目をあげたときの顔は、ひどく老けた感じになっていた。かつては、あふれるようなイメージ力で、巨匠の名をほしきままにした

ひとである。潤^かれはてたイメージをしぼり出すように、苛^{いら}だちながら演出しているその姿に、私は失望感を味わった。巨匠の残骸をまのあたりにするようで、ひどく無惨な気がした。

演出していても、苦しいのだろう。苦しさをまぎらわすように、新しい愛人の助監督とこれみよがしにべたつく。注意できるものは、だれもいなかった。新明好道の機嫌を損じ、スタッフからはずされることを怖れていたのである。撮影所で絶対君主の彼に目をかけられることは、エリートコースにのることを意味した。

毎日の仕事で、私には耐えがたいものにおもわれた。カチンコをたたき、監督のあとに影のようにしたがって監督椅子^{ディレクターチェア}をもち歩く。そして、新明好道の一顰一笑^{いつげんいつしやう}にたえず気をくばり、彼の気持ちを読んで先ぎに行動しなければならない。

自閉的な性格の私には、もっとも苦手な仕事であった。「火の鈴」の作者に会ってみたい、とおもった。この作者となら、気をゆるして話しあえるような気がした。郷里の話から、脚本や映画の話を一晩ゆっくりしゃべりあってみたい。

撮影がはやく終わった雨の日の午後、私は横須賀にいった。ちょうど梅雨にはいった季節のことである。

その住所に、「火の鈴」の作者は住んでいなかった。正確に言えば、ひと月前までは横浜に隣接した追浜のはずれに住んでいたのである。

探しあてた先は、海へまっすぐにのびた駅前通りを左に折れ、曲がりくねった路地のいきどまりに

ある小さなアパートだった。傷みのきた木造の二階建ての建物で、背後は白茶けた岩肌がむき出しになった急傾斜の崖になっている。栗山重吉は、一階北端の六畳一間の部屋を借りていたらしい。

管理人に転居先をたずねた。

初老の管理人は、

「知りませんね」

そっけなくいい、眉根をよせて、

「なにをしてるひとなんですか、あのひとは」

と、逆に私に質問してきた。

栗山重吉は、半年前にこのアパートに引っ越してきたが、終日、部屋にとじこもり、ほとんど外出しなかったらしい。四十をこえているようにみえたが、独り暮らしだった。痩せて顔色の悪い長身の男だったが、部屋の前を通ると、たえず呪文のようになにか独り言をいつている声がきこえた。

部屋代のはらいがよくおくれた。催促すると、消えいりそうな声でわびたが、落ちくぼんだ目は刺すように光っていた。

週にいちど中年の女がたずねてきた。不細工な顔の太った女だが、女がきいても部屋から笑い声も聞けるようなことはなかった。

それ以外に訪問者はなく、周囲との交渉はいっさいなかったと、管理人は嫌悪をふくんだ目で説明した。

手がかりは失われた。